

令和7年度第2回三重県教育改革推進会議
県立高等学校の在り方調査研究部会
議事概要

1 日 時 令和7年9月4日（木）13時30分から15時30分まで

2 場 所 三重県総合教育センター 第4講義室

3 出席者

三重県教育改革推進会議県立高等学校の在り方調査研究部会委員 9名

松 浦 直 己 部会長	井 上 珠 美 委 員
加 藤 崇 英 委 員	川 北 睦 子 委 員
黒 田 喜 昭 委 員	立 花 美 緒 委 員
田 中 望 委 員	平 山 大 輔 委 員
廣 瀬 琢 也 委 員	

（欠席：田村知子委員）

（事務局）

大屋副教育長、早田次長、

一尾教育政策課長、佐川学校経理・施設課長、山北高校教育課長 ほか

4 配付資料

資料1 三重県教育改革推進会議県立高等学校の在り方調査研究部会委員名簿

資料2 令和7年度第1回県立高等学校の在り方調査研究部会において出された
意見の整理

資料3 令和7年度第2回県立高等学校の在り方調査研究部会 論点

資料4 論点に関する補足説明資料

資料4（別紙） 学校規模と教育環境について
立花委員説明資料

5 調査研究（次期県立高等学校活性化計画の策定に係る県立高等学校の学び並びに規模及び配置の在り方について）

一尾教育政策課長から資料3（論点）及び資料4（論点に関する補足説明資料）について説明。

立花委員から資料に基づいて説明。

出席委員からの主な意見は次のとおり。

（井上委員）

- 三重県教育ビジョンで示された子どもたちに育みたい力（「自立する力」、「共生する力」、「創造する力」）をどのように具現化していくかを考えながら、校舎などの在り方を考えていく必要があると感じた。
- 立花委員から示された先進的な施設と、雨漏りがするような現場の校舎との差は大きい。まずは、安心して学べる校舎の整備をお願いしたい。
- 1学年1学級の学校では、人間関係に問題が生じると、そのままそのクラスで過ごしていくのが難しくなる場合もあり、適正な規模というものがあるのではないかと感じる。
- 勤務している高校でも多様な生徒が入学しているが、生徒一人ひとりを丁寧に見ることはできている。学校規模に応じて教員は多く配置されるため、規模にかかわらず生徒一人ひとりを丁寧に見ることはできる。
- 交友関係が限定されるよりは、多様な生徒と触れ合う機会があるほうが良い。設置できる科目数や部活動数のデータを見ても、1学年4学級以上が適正ではないかと考えている。
- 校務は学校規模にかかわらず存在する。1学年1学級の高校では、教員一人当たりの負担が大きく、学校運営の面からも厳しい状況であると聞いている。

（平山委員）

- 子どもたちが高校に入学してからの学びの選択肢の多様性を考えると、少なくとも4学級は必要ではないか。一方で、生徒が減少する中、特定の学校の規模を維持しようとすれば、ほかの学校の小規模化や廃校にもつながる。学校規模だけでなく、中学生が高校を選ぶときの選択肢の維持も同時に考える必要があるのではないか。
- 今後、学校施設を改修する際には、ICTの活用を見据えた施設整備をしていくことが大事になってくるのではないか。

(田中委員)

- 保護者としては、たくさん学級がある方が好ましい。生徒が減少する中、学校の小規模化が避けられないとしても、いじめがあったときなどを考えると、1学年1学級より1学年2学級のほうが良い。
- 耐震の面なども含めて、学校は安全・安心な場所であってほしい。

(黒田委員)

- 中学校での勤務経験から、1学年1学級では人間関係や部活動、教員の負担の面で大変厳しいと感じる。
- 通学に一定の時間や費用を要する家庭に対しては、何らかの支援をする必要があるのではないか。
- 1学年3学級以上は必要ではないか。生徒が減少する中、1学年1学級や2学級では、よほどの特色がない限り、今後存続していくことは難しいと感じる。

(廣瀬委員)

- 全国的に少子化が進む中では、小規模校が標準となることが想定される。どの地域にも近くに通える学校があって、社会性や専門教科などは遠隔授業や集中講義で学ぶといった柔軟な体制も検討する必要があるのではないか。

(加藤委員)

- 今後は1学年2学級や3学級の学校を、いかに維持していくかが具体的な課題となるのではないか。
- 都市部の高校は大規模で、地方の高校は小規模でオンラインを活用するなど、地域に応じたスタイルをそれぞれに設定していくことが必要ではないか。

(川北委員)

- 学校教育や学校、教員の役割について、再定義が必要な時期に来ているのではないか。
- 学校施設の整備に係る財源の確保には、クラウドファンディングやPFIなど、多くの方法があると思う。

(立花委員)

- 小規模校は財政的に残すことが困難であることは理解しているが、適切な規模は生徒によって異なる。大規模校が合う生徒もいれば小規模校が合う生徒もいる。他県の国際バカロレアプログラムを提供する事例のように、教育を特色づけた先端的な小規模校としていく選択肢もある。

- 学校施設は、今後 50 年、80 年、100 年と使っていく前提で、柔軟に設計していく必要がある。

(井上委員)

- 現行の県立高等学校活性化計画では適正規模について言及していないので、次期県立高等学校活性化計画ではそこについて言及してほしい。
- 三重県の普通科、専門学科、総合学科の割合については、今後も、今のバランスを維持することが良いのではないかな。

(廣瀬委員)

- 中学校では部活動の地域移行が進んでいる。高校でも部活動の全てを学校で保障するのは限界があるのではないかな。
- 現状や財政的なルールだけで考えるのではなく、10 年ぐらい先を見据え、何を特色にしていくかを考える必要がある。

(黒田委員)

- 中学校での勤務経験から、中学生が高校を選択するに当たって、部活動の占める割合は大きいと感じる。
- 高校の数は減らさざるを得ないという総論には賛成しても、いざ自分の地域から高校がなくなるという各論になると反対する人が多いように感じる。そうであったとしても、子どもたちが高校に何を求めているのかという声を基に、子どもファーストで進めていただきたい。

(平山委員)

- 子どもファーストで考えることは大事だが、子どもは一樣ではないことに留意する必要がある。そのことを踏まえると、多様な選択肢を提供することが基本となるのではないかな。
- 10 年後を見据えた議論だけをしていると、今の中学生が置き去りにされている感覚を抱かせてしまうので、注意してほしい。
- 地域での議論に全てをゆだねてしまうと、意見が対立して議論がうまく進まない。県がグランドデザインを示した上で、地域の特性に合わせて議論してもらうほうが望ましいのではないかな。

(立花委員)

- 部活動だけでなく、体育館や図書館といった施設についても、学校だけで完結させず、地域と連携していく余地があると感じた。

(了)